

現代の子育て支援の在り方

社会福祉学部 社会福祉学科 4年 13FF5708 米山和樹

はじめに

日本では現在、多世帯同居世帯の減少や都市化などの影響により、家庭のみで子育てを行う傾向になっている。また、核家族の世帯が多く存在し、子供の成長に関してあまり良くない傾向だといわれている。「家庭の教育力の低下」「コミュニケーションの希薄化」「青少年非行」「不登校」「児童虐待」など、教育面に関する問題の原因には、家庭での孤立化があげられている。(※1) 現代では父親である男性が外で仕事をし、母親である女性が家の中で家事・育児を行うのが一般的なスタイルになっている。核家族の場合、周りに頼る人がおらず、女性としては、一人隔たれた中で子育てをしなければいけなくなる。一人での子育ては困難であり、子供が急に泣き出したり、食事を摂ってくれなかったり、母親の思い通りにならないことが山程あり、ストレスを抱え込んでしまい、その結果、育児ノイローゼになってしまう。そのストレスが子供に向けられ、最悪の場合、子供を虐待してしまうことがある。周りの環境での子育てに関する無関心が母親と子供が地域から孤立させてしまう。その結果母親には精神的ストレスがかかってしまい、子供に適切な子育てを行うことができないという問題が発生する。そして子供を取り巻く環境も変化しており、最近では「子供が自由に遊ぶことのできる時間・空間・仲間の三間の縮小化」が指摘されている。つまり子育て支援が必要となったのは社会全体から子供を育てる機能やゆとりが失われているためなのである。(前田、1997、p209)現代の母親達は育児という責任を一人で背負わなければならないという孤立感に苛まれ、今まさに押しつぶされそうとしているのである。このような孤立化を防ぐために地域での密着した子育て支援が求められてくる。

1 父親の育児参加の現状

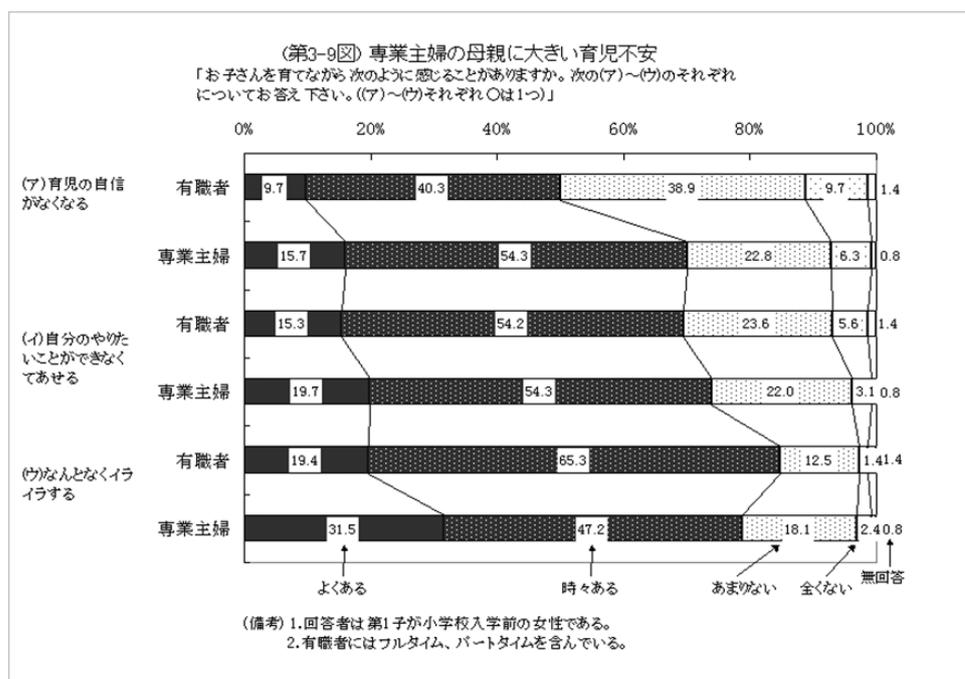
母親の孤立を防ぐためには父親の協力が不可欠である。しかし現代では、子育ては主に母親の役目であり、父親の協力が得られていないのが現状である。総務省統計局「社会生活基本調査」(1996年)によると、夫婦と子供のいる世帯の平日の家事、育児時間は無業の妻は7時間であるのに対し、有業の妻は4時間であった。しかし、夫の家事、育児時間は妻が無業である場合、15分、また有業である場合も11分と、とても短いことが分かる。専業主婦に不安感が強いことや働く母親が増えてきていることを考えると、父親の育児参加は必須であると考えられる。日本の男性の育児参加が低いのは、労働時間が長いことと、また家事育児は女性がすべきだという考えが根強いことが一つの原因であるといえる。日本では性別役割分業が根強く存在する。性別役割分業とは「男は仕事、女は家庭」というように、生物学的な性の違いによって男女の社会生活や生き方を区別することをよしとした考え方である。(濱野、1995、p67)しかしこの考え方は間違っているとわたしは考える。どちらかが仕事をしても、どちらかが家事を行っても良いというような自由な考え方が適切である。そして子育てに関しては夫婦が協力し合って行っていくべきである。最近では男の子育てがブームになったこともあったが、日本の男性の育休取得率は未だに

低いものとなっており、男性の子育てに関する無関心が子育ての孤立化にも繋がっていると考えられる。

そんな中でも面白い活動をしている法人がある。子育てへの関心をもってもらうことを目的に活動しているファザーリングジャパンというNPO法人である。ファザーリングジャパンでは、男性の育児参画を啓発・推進するために、セミナーやワークショップなどを開催している。こどもの世話の仕方や遊び方を学ぶワークショップ育児をする時間を作るために仕事・育児・家事の両立や育休取得などのワークライフバランスの推進セミナーを行っている。他にも男性向けの料理講座などの活動を行っている。(※2)子育てをしない男性が多いというのはまず子育てを知らない男性が多いということであり、知らないのであれば子育てに協力できないのは必然である。こうした活動は、男性の子育てを理解するきっかけとなり、家庭でも協力してくれる父親が増えるのではないか。母親の孤立を防ぐためにはこうした父親の協力も必要である。

2 主婦が求める育児支援とはなにか

現状を知るために母親が求める育児支援について考察していく。平成9年度に第1子が小学校入学前の女性を対象に行われた経済企画庁国民生活局による国民生活選好度調査(※3)によると育児中に感じることを尋ね、これを有職者・専業主婦別にみると「育児の自信がなくなる」「自分のやりたいことができなくてあせる」についてはいずれも専業主婦の女性の方が「ある」の割合が高い。また、「なんとなくイライラする」についても「よくある」の割合が12ポイントも有職者を上回っており、専業主婦の方が子育て中に感じる不安感が大きいことが示されている。



次に2005年に実施された首都圏の主婦(夫がいる人)で、現在就労していない、末子年齢が3歳以下の97名に対して「専業主婦の育児支援や託児についてのアンケート」につい

て検証する。調査の結果子育てで困っていることで多く挙げられたのは「自分の時間が無い」69.1%、「やりたいことができない」66.0%などであった。やはり一日中子育てに追われると自分のことを考える余裕がなくなってしまうことが分かる。子供に関することでは「子育てが思い通りにならない」24.7%などであった。また子育てを支えてくれる人は誰かという項目ではママ仲間と答えた人が90.7%、続いて自分の親85.6%、夫82.5%となっている。

このことから共に子育てに悩む仲間や自分のことを理解してくれる家族の存在が求められており、地域で子育てをサポートできるコミュニティが必要であることが分かる。

3 地域での子育て支援

今日、子供たちとその家族の問題が、地域での孤立化を要因として取り上げられている。社会性を獲得しないまま成長する子供や、子供の気持ちが分からないまま苛立ちを抱える母親たちの姿が明らかとなっている。現代社会において人が一個の人間として成長し、社会化されるためには「集団性」や「共同性」が必要である。(濱野、1995、p100) その拠点が地域であり、子供が社会性を育んだり、母親が悩みを相談できる地域単位でのコミュニティが必要である。その一つが子育て支援センターである。

地域全体で子育てを支援する基盤の形成を図るため子育て支援センターがある。子育て支援センターとは子育て支援のための地域の総合的拠点であり、無料相談や関連機関の紹介、子育てサークルの活動支援などを行う施設である。1993年度に国の事業として創設され、現在、全国で2500カ所以上ある。(※4) 専属の保育士が、育児に悩んだり不安を感じている父母の相談に応じて必要なアドバイスをおこなったり、子育てサークルの育成を通じて同年代の子供を持つ家庭同士のネットワークづくりを支援するなど、核家族が当たり前となった時代のなかで、地域全体で子育てをバックアップする福祉サービスの中核施設として役割を果たしている。事業内容としては次のものなどが挙げられる。

①育児不安等についての相談指導

地域の子育て家庭の保護者や児童等に対する相談指導を行うとともに、各種子育てに係る情報の提供、援助の調整を行い、その他に、実施可能な施設においては、看護師又は保健師等による保健に関する相談等を実施する。

②子育てサークル等の育成

支援子育てサークル活動等を行う者の育成・支援を行う。

③家庭的保育を行う者への支援

市町村が単独事業として行う家庭的保育を行う者(いわゆる「保育ママ」。以下「保育者」という)の相談指導や巡回指導を行うとともに、保育者が預かる児童を保育所行事に参加させたり、体験集団保育を行い。さらに、保育者に対する研修、保育者の相互の情報交換を図るための支援を行う。

このように地域単位での子育て支援を行うことで家庭が地域から孤立するのを防ぐことができ、なにかあったときに地域で相談できる場所があるのは母親と子供にとって安心して暮らしていけることにつながる。そして子育て支援においてはネットワークに参加する意欲がない人や地域社会との関わりを拒否する家庭にも着目するべきである。利用者を遠ざけないようなアウトリーチが必要である。ここで言うアウトリーチとは支援センター側

が家庭にアプローチすることである。地域に密着できるような新しい支援の構造が現代では求められている。

4 望まれる子育て社会の確立

子育て支援はさしあたりは親の支援であるが、それは子育てによって子供が健やかに育ってもらうための支援でもある。したがって子供にとってどういう環境や関係があればいいのかを常に考えながら行うことが不可欠となる。現代の子育て支援は施設主義的なものが多く、施設を作り、そこに来るように働きかけて初めて支援が成立するというものが大部分である。参加しづらい人の多くは孤立感が強い人であることから支援の場を多様化し、こちらが向かうもの、ネットを通じて結び付き合うもの、近所の子育て仲間を作ることを支援するなど、孤立している人をなくす網目を作ることが肝心になる。

まとめ

今の子供たちの「子育て困難」な状況の背景には、大人と子供の生活破壊があり、大人が過重労働で多忙になる中で、子供の生活が犠牲にさせられているのではないか。(丸山、2003、p55)また核家族化と都市化に加え、近年の少子化の急激な進行の中で子育て家庭は地域で孤立されつつある。複合家族の場合、親が経験や知識を持って、育児の方法を教えてくれたり、手助けをしてくれたりすることもできるが、家族が別々に暮らして行くことに何も問題ない現代では母から子へ、子から子孫へという育児の伝承は途絶えようとしている。

子育て支援は母親がいきいきとしてこそその支援である。「子育ては母親の仕事。母親であれば子育てが立派にできて当たり前。子供に何かあれば母親の責任という母性観」(大日向、1999、p248)という価値観が性別役割分業の中にあり、多くの人負担となっている。しかし子育ては社会一般から押しつけられるべきではなく、子供の成長を見守り支援していこうという努力は父親は勿論、地域の人々など社会全体に求められていることである。母親や子供が孤立化しないためにはすべての人々が子育てに関心を持ち孤立の状態から母親を救い母親にゆとりのある子育て環境を保障することが重要である。これは母親にとっても子供にとっても良い影響をもたらす親も子と成長することにつながる。親子が喜びを分かち合い語り合うことができる子育てが現代には求められている。

<参考文献>

- 汐見稔幸,2008,『子育て支援の潮流と課題』 株式会社 ぎょうせい
丸山美和子,2003,『子供の発達と子育て・子育て支援』 かもがわ出版
前田正子,2004,『子育てしやすい社会』 ミネルヴァ書房
大日向雅美,1999,『子育てと出会うとき』 NHKブックス
濱野一郎、網野武博,1995『子供と家族』 中央法規出版

注

(※1)

<http://www.sazae-links-people.com/there-families/problem-nuclear-family-proceeds/>進む

核家族化の問題点

(※2)

<http://fathering.jp/activities/fatherhood/>ファザーリングジャパン

(※3)

<http://www5.cao.go.jp/seikatsu/senkoudo/98/19980219c-senkoudo.html>/平成9年度国民生活選好度調査

(※4)

<https://kotobank.jp/word/%E5%9C%B0%E5%9F%9F%E5%AD%90%E8%82%B2%E3%81%A6%E6%94%AF%E6%8F%B4%E3%82%BB%E3%83%B3%E3%82%BF%E3%83%BC-187190/>子育て支援センター